

図4-1 キリスト磔刑を描いた象牙版



(出所) Musées de Metz (2007), p. 51.

図4-2 同象牙版の細部(右は鷲=ヨハネ, 左は牛=ルカ)



(出所) Musées de Metz (2007), p. 51.

受けて「メランコリー」による靈感の恩恵にあずかった可能性が出てくる。この説を裏付けてくれるのが、フランス・ロレーヌ地方北部の町メッスのラ・クール・ドール美術館が所蔵する、キリスト磔刑を描いた象牙版である(縦15.2cm, 横9.2cm)。カロリング朝時代(おそらく984年から1005年頃)に作られたこの象牙版で注目すべきは、下部に描かれた4人の福音史家である。左から右へ順にマタイ、マルク、ルカ、ヨハネが、テトラモルフ²⁴⁾の伝統

24) 福音史家を動物と関連づけたのは、2世紀に活躍したりヨンの第2代司教エイレナイオスとされるが、その根拠は『ヨハネの黙示録』4, 7-8に認められる神の玉座の幻視を記した一節であり、「第1の生き物は獅子のようであり、第2の生き物は若い雄牛のようであり、第3の生き物は人間のような顔をもち、第4の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった」と記されている。この一節は、旧約聖書の預言者エゼキエルが体験した4つの生き物の幻視の説明にもとづく(『エゼキエル書』1, 5-14)。

に則ってそれぞれ人間、ライオン、牛、鷲の姿で描かれているが、このうちヨハネを表す鷲は、右手を頬に当てるといった典型的な「メランコリー」のポーズを取っているのである（図4-1、図4-2）。

「新約聖書」中4番目の『ヨハネによる福音書』の著者が、「新約聖書」の巻末に置かれた『ヨハネの黙示録』の著者と同一人物であったとするなら、『ヨハネの黙示録』10が伝える「巻物を食べるヨハネ」の場面は極めて重要になってくる。それは7つの封印が解かれ、7人の天使が次々にラッパを吹く件で、第6と第7のラッパの間に地上に降りて来た天使から渡された小さな巻物をヨハネが食べる場面である。巻物をヨハネに渡すとき、天使は「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」と述べ、ヨハネは実際にその感覚を味わうのである。

地上の王国の滅亡（黙示録）を描いたヨハネの祝日が、年末の「冬至」近くに位置するのは偶然ではない。「山羊座」を介して「土星」の影響を受けたヨハネは、「メランコリー」を喚起する「腹には苦い」巻物を口にすることで、人智を超えた神の「み言葉」との交わりを実現し、それを人間の言葉で著したのが『ヨハネの黙示録』ということになるからである。「土星」はローマ神話のサトゥルヌス（ギリシア神話のクロノスに相当）に対応するが、生まれた子供たちを「時」を司るサトゥルヌスが次々に飲みこんでいく行為は、聖ヨハネが巻物を食べる行為と二重写しになってくる²⁵⁾。サトゥルヌスを称えるサトゥルナリア祭も、12月17日から1週間行われたとされる。これも同様に「冬至」の時期に対応していることを忘れてはならない。

5. 洗礼者ヨハネと野人

「新約聖書」の冒頭に置かれた4つの福音書の中で、『ヨハネによる福音書』だけが「序文」を『創世記』のように書き出し、神の「み言葉」について述べている²⁶⁾。「み言葉」が「人間（肉）」となって顕現したことを、ヨハネは書物のかたちで記していく。これに対し洗礼者ヨハネの場合は、彼の「生の言葉」が福音史家たちによって記されている。洗礼者ヨハネは、旧約聖書が象徴する旧世界の最後の「預言者」である。

25) 「我が子を食らうサトゥルヌス」の図像としては、オランダの画家ルーベンスが16世紀に描いた絵画と、スペインの画家ゴヤが19世紀に描いた絵画が有名であり、いずれもマドリードのプラド美術館が所蔵している。一方、ヨハネが巻物を食べる場面を描いた図像としては、15世紀のデューラーによる黙示録木版画集に「書物を食べるヨハネ」が見つかる。

26) 「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」

福音史家ヨハネが「土星」の影響を受けたのに対し、「夏至」近くに祝日を持つ洗礼者ヨハネの方は、「蟹座」の守護星である「月」の影響を受けていたと考えられる。「月」(lune)の影響を受けて周期的に発病する人を、フランス語では「リュナティック」(lunatique)と呼ぶが、中世期にはこの呼称は、精神に異常をきたした人のみならず、靈感を受けて予言を行う人にも使われていた。中世フランス文学では、熊のように毛深い姿で誕生し、少年時代から「予言者」として活躍する魔法使いマーリン(メルラン)²⁷⁾がその典型例であるが、『マタイによる福音書』3, 4が「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食物としていた」と記す、荒れ野に住む洗礼者ヨハネもマーリンと同じく、そのモデルは古い来歴を持つ「野人」に求められる。動物の特徴を併せ持った毛深い人間である「野人」は、普通の人間とは異なり、狂気に駆られて行動したり反応したりするが、それは高度な知性の証なのである²⁸⁾。

「福音書」や「黙示録」を記した福音史家ヨハネが神の「み言葉」と向き合ったように、洗礼者ヨハネも「預言者」として、神の「み言葉」と特別な関係を持ち続けた。それは早くも、洗礼者ヨハネの誕生にまつわる有名な挿話から認められる。『ルカによる福音書』冒頭によると、ユダヤの王ヘロデの時代に、神の前で非の打ちどころのない生活を送っていた祭司ザカリアとその妻エリサベトは、老齢になるまで子宝に恵まれなかった。ところがあるとき、天使がザカリアの前に現われ、妻が男児を産むのでヨハネと名づけるように言う。ところが老齢のザカリアは天使の話信じられず、疑問を投げかけたため、それ以後口がきけなくなってしまう。やがて月が満ちてエリサベトが男児を出産し、ザカリアが板に「この子の名はヨハネ」と書くと、たちまち口がきけるようになり、神を賛美し始める。つまりザカリアは息子ヨハネの誕生により、言葉を取り戻したことになる。この奇跡は、「夏至」という特別な時期にヨハネが誕生したことと不即不離の関係にある。

時代は下るが、ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』(1261~67年頃)が収録する「洗者聖ヨハネの誕生」によると、モンテ・カシーノの修道士だったパウルス・ディアコヌス(720年頃~799年)が、あるとき蝋燭を聖別しようとしたところ、急に声が出なくなったという。そこで声が出ないようにと願い、聖ヨハネのために賛歌を作ったという²⁹⁾。賛歌は「おお、おんみのしもべたちがみわざをたたえる喜びの声を張りあげることができますように」(UT queant laxis / REsonare fibris / MIra gestorum / FAmuli tuorum...) というもので、各節の最初の2文字がド、レ、ミ、ファに相当するフランス語の Ut, Re, Mi, Fa と

27) 拙稿「マーリン」(松村・平藤・山田編(2013), 500-501ページ)を参照。

28) 「野人」については、ヴァルテール(2007), 57-61ページを参照。

29) デ・ウォラギネ, ヤコブス(1984), 324ページ。

いう階名唱法の基礎となった。したがってこの逸話は、言葉を超越する音楽記号の誕生に、洗礼者ヨハネが寄与したことを示している。これもまた、洗礼者ヨハネと人智を超えた神の「み言葉」との緊密な結びつきの証である。

おわりに

「自分はメシアではない」「自分はその方(=イエス)の前に遣わされた者だ」と公言していた洗礼者ヨハネは、イエスの先駆者であるばかりか、「預言者」としてユダヤ地方で活躍した、いわば「生の言葉」の具現者である。一方の福音史家ヨハネは、神の「み言葉」に対して「書き手」として向き合う存在だった。「腹には苦いが、口には蜜のように甘い」という小さな巻物は神の「み言葉」の象徴であり、これを食べたヨハネが著した「黙示録」は、いわば奥義を示す「イメージ」を「言葉」に変換したものとも言えるだろう。このように2人のヨハネがキリスト教神学において果たす役割は、神の「み言葉」を形而上学的に解釈する上で極めて重要である。その靈感の源は果たしてどこにあるのか？ この謎を解く鍵を本稿では、2人の祝日が暦の上で占める位置に求めた。

太陽(神)の誕生日に他ならない「冬至」周辺に祝日を持つ福音史家ヨハネは、「冬至」に太陽が通過する「山羊座」の扉の番人であり、「山羊座」の守護星「土星」の影響を受けて「千里眼」になったと考えられる。『ヨハネによる福音書』の冒頭で、万物の始まりに他ならない神の「み言葉」に思いを馳せたヨハネは、この世の終わりを語る『ヨハネの黙示録』の作者でもあった。一方の洗礼者ヨハネは、「夏至」に太陽が通過する「蟹座」の扉の番人として、「蟹座」の守護星「月」の影響を受けて「預言者」になったと考えられる。キリスト教徒になるための通過儀礼に他ならない「洗礼」を司る彼は、イエスが救世主となる新世界から見れば、旧世界の最後の「預言者」であった。先述の通り、2つの顔を持つ古代ローマの神ヤヌスは、中世のキリスト教世界では2人のヨハネとして再解釈されたが、2人のヨハネは、いずれも「始まり」かつ「終わり」を具現するヤヌスのごとき存在だったのである。

参考文献

- ヴァルテール、フィリップ(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)(2007)『中世の祝祭 伝説・神話・起源』原書房。
- ヴァルテール、フィリップ(渡邊浩司訳)(2011)『《世界終末のしるし》としての《太陽の死》』(『仏語仏文学研究』中央大学仏語仏文学研究会、第43号)161-177ページ。
- ヴァルテール、フィリップ(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)(2014)「さまよう靈魂、カボチャと幽霊 ハロウィンのイマジネール」(『中央評論』中央大学、66巻3号(通巻289号))126-131ページ。

- 尾形希和子 (2013) 『教会の怪物たち ロマネスクの図像学』 講談社選書メチエ。
- 蔵持不三也 (2013) 「祝祭論 アルザス地方の火祭りとその変容」伊東一郎・蔵持不三也・松平俊久著 『ヨーロッパ民衆文化の想像力』 言叢社, 79-118ページ。
- R. クリバンスキー・E. パノフスキー・F. ザクスル (田中英道監訳) (1991) 『土星とメランコリー 自然哲学, 宗教, 芸術の歴史における研究』 晶文社。
- クルマン, オスカー (土岐健治・湯川郁子訳) (1996) 『クリスマスの起源』 教文館。
- 児嶋由枝 (2006) 「笛吹き3月 北イタリア・ロマネスク聖堂に見る12ヵ月の擬人像」(『上智史学』 第51号) 157-176ページ。
- デ・ウォラギネ, ヤコブス (前田敬作・山口裕訳) (1984) 『黄金伝説2』 人文書院。
- 日本聖書協会 (2001) 『聖書 新共同訳』。
- ネルヴァル, ジェラルド・ド (篠田知和基訳) (1991) 『オーレリア』 思潮社。
- ノードン, ポール (安斎和雄訳) (1996) 『フリーメーソン』 白水社。
- ブラウンリッグ, ロナルド (別宮貞徳監訳) (1995) 『新約聖書人名事典』 東洋書林。
- 堀田郷弘・奥平堯・植田祐次 (1983) 『フランスことわざ歳時記』 社会思想社。
- ホメロス (松平千秋訳) (1994) 『オデュッセイア (下)』 岩波文庫。
- 松村一男・平藤喜久子・山田仁史編 (2013) 『神の文化史事典』 白水社。
- 吉田敦彦 (1975) 「ヤヌスの2つの顔」(『エピステーマー』 11月号) 162-185ページ。
- Gaignebet, Claude (1986), *A plus haut sens. L'ésotérisme spirituel et charnel de Rabelais*, tome II, Paris: Maisonneuve et Larose.
- Grimal, Pierre (1944), *Le dieu Janus et les origines de Rome*, Paris: Berg International.
- Guénon, René (1962), *Symboles fondamentaux de la science sacrée*, Paris: Gallimard.
- Le Roux, Françoise, et Guyonvarc'h, Christian-J. (1995), *Les fêtes celtiques*, Rennes: Ouest-France.
- Macrobe (1997), *Les Saturnales*, Livres I-III, trad. par C. Guittard, Paris: Les Belles Lettres.
- Migne, Jacques Paul (1841-1855), *Patrologiae Cursus Completus. Series Latina*.
- Musées de Metz (2007), *Dossiers d'oeuvres*, Metz.
- Walter, Philippe (2002), «Saint Jean, les signes et le Verbe», J.-F. Chassay et B. Gervais (dir.), *Les lieux de l'imaginaire*, Montréal: Liber, pp. 129-144.